

今日世雄住諸仏所住

此段は世の大雄者たる仏陀は精神的に常恒に究竟して安穩の処に住し玉う。何人も精神を転じて真実に安穩に心の生活ができることを知らず、自から顛倒して心に苦悩と憂怖を造りつつ世に処しておる。世の人は生得顛倒しておる。故に安樂を覓めんと欲して却て憂悩の因となり、心の為に走使せられて安時なきを憐れみ、仏陀は自ら心が弥陀の大安樂の光明裡に安住なされてすべてを誘いて自心の安住し玉う処に引導し玉う。

此段は感情的の宗教心にて全体人の感情は弱き者である。而して喜怒哀樂憂怖苦悩等は是感情の作用である。人は理としては、さまで憂慮苦悶する程でなくも、其場に当て感情は動搖せざるを得ぬ。自から安ずること能わざるに至る。

実は人の天性に物を苦悶する性を有ておるは宗教を要求すべき予備器具である。全く人生の苦悶を感じて真実に道を求めて要求が徹底的に進みて霊的大光明に接触し心機一転する時は精神的に復活し光明中に安住することを得らる。是に到りて初めて真の安穩である。此段は衆生の感情の苦悩を解脱して常住の安穩処を与え玉うなり。

仏陀は世の大雄者

全体此世間は有為転変の世、三界の火宅に生を受けて此儘真に安心のできぬのが当然である。未だ真に絶対なる如来の光明中に入ることなくして然も現在真に安穩なりと謂うておる。天然の人は実に未だ幼稚なる意識にて真実自家の本能に有ておる弱点とまた此世界が人類に対する規定を自覚せざるが故に安氣でおる。即ち法華の譬喩

長者ちやうぢやの腐朽ふるくちたる大厦たいかに其屋上そのおくじやうにも其屋辺そのおくへんにも諸もろもろの惡獸あくじゆう毒蛇どくじやとう等の己おのれらを害がいせんとし
 つつあり。また屋へやの一方いつぱうよりは焰然えんぜんと火ひは燃もえつつあり。実に怖おそるべきも、其室内そのへやのうちに戯たわむ
 れ遊あそぶ頑がんぜ是しやうにちなき小兒しょうにち等は矇昧もつまいにして未いまだ毫ごうも之これを顧慮こりよするの智ちなく、必かならず此この諸もろもろの害がい
 毒どくに庄迫あつぱくせらるることを覺さとらず、還かえつて安氣あんきに戯たわむれるが如ごとし。是これらは実じつに憐あわれむべき輩やからな
 り。現げんに世間せけんを見るに貧富ひんふ尊卑そんびを論ろんせず賢愚けんぐ省不省しやうふしやうを問とわず、概がいしてかような状態じやうたいに
 只理性ただりせいを痲痺まひせしめ、只五欲ただごよくの奴隸どれいと為なつて五里霧中ごりむちゆうに世よを過すどす者もののみ皆々みなみな然しからざるは
 ない。然しかし彼かの愚昧ぐまいなる氣楽流きらくりゆうは全きらくりゆうく顛倒てんどうして現在げんざい自己じこの苦惱くのうを自覺じかくせざるが故ゆえに、
 若もし一朝いつちやう予期よきする利益りえきを失うしない己身おのれのみに蹉跌さてつの毒火どくかの燃もえつくことに値遇ちぐうせば、忽たちまちに悲泣ひきゆう
 悶絶もんぜつし或あるは發狂はつきやうし或あるは自殺いじさつを敢あえて為なすに至いたる。故ゆえに人生じんせいの秘奥ひおうを覺さとらず、衆生しゆじやうの依止えし
 する世界せかいの真意義しんいぎを識しらずして而しかも此世このよに処しよして人生じんせいを辿たどりつつあるものは実じつに危き険けん
 な次第しだいである。されば世眼せげんたる仏陀ぶつだは衆生しゆじやうに大安穩だいあんのんの立脚地りつきやうちを与あたえ、いかなる震災風しんさいふう
 害がいすいかにいふうさいかいにも大安穩だいあんのんなる処ところに人ひとの感情かんじやうを安置あんちすべき位置いちを教おしえ玉たまえり。

若し仏陀の教により現在生れたままの心には之を脱却せざればならぬ垢質を天然に持っておる。之を脱して精神が一転して自然に大安穩に復活すべき道は即ち仏陀の教なる弥陀の光明を獲得し此光明に依て心機一転して靈的に活るにあり。若し靈に活る時は縱令身は有為轉變の娑婆に在り乍ら神は弥陀の歡喜安樂の光明中に住することを得。大雄仏陀は自から人間の性に具えておる感情の憂怖苦惱の元素をば弥陀の光明によって融合し美化し、人格一変して如来の中に安住し玉う。若自己本具の煩惱は之を美化すれば還て安穩靈福を感じらるべき要素たることを覺らる。例せばいかに洩き柿の果実も能く乾燥する時は還て甘味と為るが如し。

人の感情は一方には自己感情其物が一転して美化し一面には有限の世界に依属せずして絶対大靈の弥陀の中に安住する時は眞実安穩得らるべし。一方には自己天然の幸福主義の主我を根本的に挫きて金剛宝石の我に活きて自己が革新したると共に從來の相対的世界に依属したる心を転じて絶對なる弥陀の光明界に安立を求むるにあ

り。若しここに到らば精神的に浄土の人となることを得。喻えば闇夜の歩行は不安を感じずれども日中は安心なるが如し。一度信仰に醒めて光明中の生活に入らば必らず安穩なる住処を得らる。仏陀は既に自家革新して大雄者と為り弥陀大我の中に安住して一切衆生を誘いて自己の安立し玉う処に安住せしむ。

釈尊凡位の苦悶

仏陀既に成道の後には絶対なる弥陀涅槃城に安住し玉いて常住安穩に在せども、昔曾て王宮に在して太子たりし時生死問題（人生帰趣）に就て非常に煩悶し玉いし如く其先太子降誕の時に阿私陀仙が王の請に依り太子の相を觀じ涕泣して良久しくして曰く偉哉太子の聖容明かに三十二相を具し玉う。是凡夫に在まさず若し在家せば必ず転輪聖王と為て四天下を統御し玉い、若し出家し玉わば必ず一切種智を得て天人の師

と為らん。実に億劫にも遇難き大聖の出世に値い乍ら我既に年老いて死に近し此大導師に就て親しく法を聞きて道を得ること能わざるは実に千古の遺憾なりと歎ず。王之を聞き玉い一は喜び一は悲み常に意を用い玉いて出家の志を防ぎ太子をして転輪王として五天を御せしめんと欲して一に之を以て父王の望たりき。爾來父王は唯太子の出家の事のみを憂とする処、王謂らく太子の出家の志を奪うは唯太子をして世の快樂を以て満足せしむるの道あるのみ。王は太子の為に娛樂の機關を構え春秋殿を宮んで四時の娛樂に飽しめんと、或は國中より有ゆる美女を選みて采女として常侍せしむる等一国の富と力を竭して太子の志を奪わんとす。太子十七歳の時王は善覺王の王女耶輸陀羅姫を聘して妃と為し姫を左右に侍せしめ長夜の歌舞管絃は太子の殿内に演奏せらる。凭の如き天上の樂苑を地上に移せる色味の間にも太子の心中に萌發したる人生の問題の煩悶は毫も取除くべくもあらず、殊に四門の遊に深く印象したる老病死の世の無常觀は永しえに横りて片時も離れざりき。美姬等が歌舞管絃を以て太

子を眩曇せしめんとする却て太子の出家心を増長するの助縁と為るのみ。何となれば太子謂えらく憐むべし彼等が今陽春桃李一旦の栄も忽ち夕の嵐に散果る果敢を覚らず若し我れ出家して疾く生死解脱の道を悟りて彼らを度せざらんか、誰かは彼らを度すべきものぞ。太子は深宮に在て旦暮に人生生死問題に心を煩わし神を悩まし憂慮惜べくもあらず。竟に自ら惜くに忍ず一日卒然として父王の前に出で即ち出家の志を演ぶ。父王驚嘆して曰く汝出家成道して一切衆生を済度せんよりは先づ今此父の苦悶を救えよと。我れ疾く位を汝に譲りて後梵行を修せん是我が夙に願う処なりと。いかに切なる父王の望をも太子の志は遂に止むること能わざりき。

生死解脱の求道

生死問題に悶える太子は父王に対して、父王よ、我に願あり不老と不死を不病と不

愛別離あいべつりとの四よつの願ねがいをだに叶かなえ給たまわば我願満足わがねがいまんぞくせり、敢あえて出家しゅつげを為なすにも及およばざるなり
と。父王ふうおうは曰いわく此願このねがいの如ごときは何人なんびととても得うべきにあらず。得うべからざる望のぞみを断たつて現げんに
人世じんせいの幸福こうふくを享受きやうじゆするに如しかぬなり、と曰いいしも、求道ぐどうの志こころざし深ふかき太子たいしは世よの栄光えいこうは
半個はんこの価値かちなきを覚さとり唯求ただもとむる処ところは生死解脱しやうじげだつの道みちあるのみ。竟ついに臘月ろうげつ八日かの中夜ちゆうやに私ひそ
かに王宮おうきゆうを忍しのび出いで東ひがしの方阿跋弥河かたあびやがわの深林しんりんに入り此処ここにて自みづから鬚髮しゆはつを剃除ていじよし珍妙ちんみょうの衣ころも
を捨て而しかも法服ほうふくを身みに着つけぬ。更さらに進すすんで跋伽仙ばつかせんを訪おとづれぬ。彼仙かせんは苦行婆羅門くぎやうばらもんなれば
或あるは食しよくを断だんじ荆棘けいきよくに起臥きふし火ひに入り水みづに投とうじ有あゆる肉体にくたいを苦くるしむ。之これを以もつて未来天上みらいてんじやう
の楽果らくかを求もとむと。太子たいし謂おもえ彼かれは苦行くぎやうを以もつて楽果らくかを求もとむ縦令たとえしよてん諸天しよてんの楽うありと雖いえども福ふく
報ほう尽つくる時ときは六道輪廻ろくどうりんねの苦報くほう免まなれず是畢竟解脱これひつきやうげだつの道みちに非あらずと。終ついに之ことを去さりて後阿羅々のちあらら
仙せんを訪かう。彼仙かのせんの非々想ひひしやうは我がありと為なんか、我があれば知ちあり若知もしちなくば木石もくせきに同おなじ。
若知もしちあらば攀縁はんえんあり染著ぜんぢやくあり、焉いづくぞ究竟解脱くきやうげだつを得えんとて亦また之これを去さり、独ひとり伽耶がやの道どう
場じやう地ちに入り菩提樹下ぼだいじゆげに於おいて金剛座上こんどうざじやうに柔軟草にゅうなんそうを敷しいて結跏趺座けつかふざし玉たまう。若もし我われ一切智いっさいちを

得て生死の苦を解脱せずば此座を起じと誓い玉う時に菩薩が発したる一心の強き力は
 魔の宮殿を動かす、魔王甚だ憂懼し若し浄飯王子成道せば必ず我境界を侵さん。何
 の方便を以てか彼が大道心を傾動せんと。彼は舍那衣を身に被い化して小使者の形と
 変じ倉卒として菩薩の前に跪きて告上る。君何なれば自から安じて此に住し玉う。
 劫比羅城に於ては提婆王子恣に後宮に入り嫖女を染汚し諸の釈種を謀殺すと。菩
 薩之を聞玉い驚動し玉い耶輸陀羅等を憐み玉いて提婆達多の惡意をば何にして調伏せ
 んと思惟し玉うに、又忽ち念じ玉わく我今此座に坐す何ぞ斯の如き俗情の發りけん
 觀ずる時初めて是魔の所為なることを知り玉いき。又魔王が三女の容貌艶麗にして天
 上中に無比なるを使わしぬ。彼等は人を誘惑すること巧妙にして何なる人と雖ども彼
 らが誘惑に動かされぬものはない。彼三女有ゆる手段を尽し媚諂て菩薩を惑さんと
 欲するも菩薩の心は毫も動じ給わず、還て彼らを退去せしめ給ひぬ。また大魔王が十
 八億の軍勢を率い有ゆる天地を震動の勢を以て菩薩を脅迫せんとするも菩薩の三昧

定は動ずることなく金剛の意志は少も動じ給わざりき。

人の子たる太子をして舎耶の子とし靈に復活せるにあらざれば畢竟安穩の処得べからず。斯一大関門を貫徹すること最も大事なり斯関門を貫徹したる処に始めて諸仏の住処に安住し得らる。

釈尊諸仏の所住に安住所を得

仏陀は菩薩の満位に十魔を降伏し正覚を成せんとするに先だち前正覚山に登りて此にて正覚を成せんと欲して金剛の志を発し給うに、足地を没して地も菩薩の足を載するに堪ざる如し。時に空中に声あり曰く、世に二種の人あり地も載すること能わず、一は五逆悪人五逆悉く成ずる時大地裂て無間に墮す。一は一切種智を得無上正覚を得る時なり。今菩薩は無上覚を得る時至れり。禪河の辺菩提樹下に過去諸仏の成道し

給う金剛座あり此に詣でて正覚を成じ給いしと。此言を聞給い菩薩は此を去りて道場に往き給う。時に吉祥なる者あり柔輦草を石上に敷けり。哀みて之を受て樹下に跏趺座し給う。

此金剛心を以て人間の中心真髓なる肉の我を滅殺し、靈の人即ち仏と成り、有為の娑婆を頼みにせし心が転じて、諸仏所住の涅槃に安住する情操の転換せんと為に臨み従前の我なる太子の感情過去を追想し未来を想い無始來の我を執し来りし我が亡んとするに先たる種々無量の煩悶雑多の感想太子の胸裡に往来す。何ぞ夫れ苦悶なからん。肉の五陰魔及び煩惱魔また天魔等が胸中に百出して太子を襲い侵さんとす。太子奮然として大不動の金剛心を以て胸中の巨賊惡魔を叱咤し再び近づくことを許さざりき。

中夜初更を過ぎる頃、大智眼を開き横に十方を洞觀し豎に三際に徹照し、正覚の旭日東天に輝き乾坤坐斷し来る時、無始來の妄我は日光昇る時螢火の如くに光失う。

既に妄我亡びぬれば其に属する一切顛倒の妄想随て滅しぬ。肉の幸福を人生の目的の如くに執着したる煩惱も今は姿を変じ一切憂悲苦悩の源亡び、世界依属の心は転じて絶対なる大我に安住し、有為転変の立脚地を超て絶対無為の境に入る。小乗教にては主觀と客觀の兩界を超越したる真空無為の涅槃界に安住するを以て終局とす。相對規定なる世界を頼みとする心を超ゆれば生死の恐もなく、我を無にすればすべての苦樂を絶して無為自然の安穩に入る。シヨウペンハウエルが謂ゆる人は意識有るが故に憂悲苦悩あり。意識を無にすれば之を感じることを無しとの如く、凡て幸福を求めず榮華を貪らず、また世の名誉權利財産等の欲を離るる時、心坦然として常に平和なり。安穩なり。此に涅槃ありとは小乗教の消極的の安住処である。

大乘の安穩処。小乗教は仏陀証得し給う涅槃の消極的方面にして、大乘教は仏陀が正覺を成じて醒覺したる世界の積極的方面である。仏陀が正覺を成じて直に華嚴三昧に入て蓮華藏世界毘盧舍耶大我の身大自在の身常住と安樂と自在と清淨との四徳を以

て莊嚴しょうごんせる華藏けざう界かいに安住あんじゅうして自みづか受じ大法だいほう樂らくを受感じゅかんし給たまひ、一切いっさいの法身ほつしん菩薩ぼさつの爲ために
 他受たじゅ法樂ほうらくを施ほどこし給たまう。時ときに仏陀ぶつだは形體けいたいは有爲ういの世よに在あり乍なら神しんは眞常しんじょうの大涅槃だいねはん界かいに安
 住じゅうし給たまう。此ここを諸仏しよぶつの住処じゅうしよ十仏じしよの自境界じきょうがいとも自受じじゅ法樂ほうらくの都みやことも名なづく。諸仏しよぶつの正覺しやうがくの
 心こころの所住しよじゅう処生しよしやう死じを離はなれたる絶對ぜつたいの靈界れいかい即すなち無量むりやう光こう明みやう土ど、只光榮ただこうえいと幸福こうふくのみの境界きやうがいな
 り。精神せいしんが此ここに到いたつて初はじめて其その常住じやうじゅう平和へい永恒えいの生命せいめいを得う。仏陀ぶつだは心靈しんれい的てきに靈格れいかくを世雄せゆう
 と名なづく。其光明そのこうみやう界かいに安住あんじゅうするを諸仏しよぶつ所住しよじゅう処しよと曰いう。仏陀ぶつだ自みづかから之これに安住あんじゅうし給たまひて
 一切衆生いっさいしじゅの現在げんざいの感情かんじやうを即すなち妄もうなる我がを獻ささげて無量光むりやうこうに活いきて常住じやうじゅうの平和へいを得うべき道みち
 を教おしえ給たまう。

衆生顛倒を遠離すべく

仏陀ぶつだは教おしえ給たまえり。衆生しじゅの天然てんねんに有もてゐる感情かんじやうは顛倒てんどうしておる。今此顛倒いまこのてんどうを二つとし

一方には自己の天性が顛倒し、一面には現世界依属の心である。然るに此肉体は全く快樂を目的として成立たものでなく、また世界は只人生の幸福を与える為に成る物でない。然るに人は此肉体は清きものにて快樂の器にて自由にして常住までも此我自由にして居り度く欲望しておる。人は生得に肉体を以て飽迄幸福を追求し人生は快樂を目的と謂い是らが根本的に顛倒なりと。此身は快樂を享受すべき器具にて現世界は幸福を与うる舞台と想いて快樂を追求す。然るに幸福は求むれば貪るほど還て得られぬ。また凡夫が前途に希望を以て造たる快樂も接近して見れば予想せし如くの価値は得難く。經に喩を以て、渴ける鹿が遠隔の地の陽炎を見て水ありと想いて切に走りゆき接近して見れば実に水に非ざる如しと。肉の快樂に渴ける凡夫の鹿は貪るに随て只不満と不足を感じるのみ。

人生自覺の光明を獲ざる衆生、相互に闇黒の中に只己を厚せんと欲し、常に情的に衝突して競い合、人間苦の状態を仏陀は説き給えり。人間の八苦とは即ち生老病死

愛別離苦、怨憎会苦、五陰盛苦、求不得苦是なり。第一に生の苦即ち生存競争の苦此
 劇烈なる競争場裏に人は何に相互に吞噬し合なり。經に世間の人民より蠕動の類に
 いたる迄動物共通の惡は生乍有ておる。衆惡を為さんと欲し皆然らざるなし。強者は
 弱きを伏し軋た相尅賊し殘害殺戮して迭に相吞噬し己が力の及ぶ限りは吞噬わんと欲
 す。此競争は一切の階級に通じて同じく然り。鼠は猫に噬まれ猫は犬に殺され労働者
 の豪血を絞て富豪の膳に供し、其形にこそ差あれ、迭相吞噬の意味に於ては相異らず。
 富者と云ども、其精神に入て見れば、經に示す如く、世人此劇惡極苦の中に於て勤身
 營務して自から給濟す。尊も卑も富も貧きも少長男女共に錢財の為に憂慮するこ
 と適に等し。屏宮として愁苦して念を累ね慮を積み心の為に走使せられて安き時ある
 ことなし。田あれば田を憂い宅あれば宅を憂い乃至一切の衣食什物資具類に至る迄、
 之が為に憂慮せざるは無い。憂念愁怖する内に若し非常の水火盜賊怨家債主の為に焚
 漂切奪せられて消散磨滅の暁には憂毒胸中に怱々として憤を心中に結び心に堅く結

ばれて解く時有ことが無い。また経に人間相互に親疎常なく昨の親今日の敵と云う人情頼み難き世間人民父子兄弟親属等が相敬愛して互に憎嫉すること無く金銭等迄も有無相融通して貪惜なく言色共に和ぎて相違戻することない。然に一朝情に逆う時は忽ちに内の調和が欠て恚怒し合うことなれば、今世の恨が後には劇しく大怨と為に至る迄、実に然り。人情の弱きこと知るべきのみ。また経に愛別離苦の相を説き玉いて、或は父は子の為に泣き或は子が父の為に泣き或は兄弟夫婦更相哭泣す。一は死し一は生じて更に哀慙し恩愛の情忍び難く憂念が結縛し送いに顧恋して年月を率とも心に開明せず、情欲を離れず。昏矇閉塞して愚惑に覆われて解る時なしと。また人生を闇黒裡に埋没する痴漢を惑みて仰せ給く。人は人生を自ら熟ら思い計りて心端正に専精に道を行じ世事を決断すること無く、総猥憤擾して皆愛欲を貪り、道に惑える者は衆く之を悟るものは寡し。世間は恩々として謬頼すべきことなし。尊卑上下の別なく各殺毒を懷きて悪気窮冥にして妄に事を興さんと為し、天地に逆違し人心に順わず。

自然の非惡先づ随て之に与みす。恣に為すがままに任して罪の極りを待つと。是れ仏陀が人生の光明を認めず、顛倒の中に世界の栄花に憬がれつつも世界は彼等がために満足を与えぬ。身老衰すれば身体の生活機関も老朽し憔悴し、四大衰損し四支の自由を欠ぐのみに非ず、前途の希望も閉塞せられ世間には疎外せられて只朽残せる霜枯の草の如き果敢なき人の末路かな。或はまた病痼の為に呻吟し疼痛辛酸のみにあらず。前途を悲觀し希望は挫折せられ種々の苦悶は競い來り死を求むるも得ず。生を求むるも得ず。凭る人生の裡に潜める慘状は何人も必ずしも無いとは云われぬ。

また世の薄俗の常として、順境に在れば、栄花に甘い栄曜に誇り自ら得たり顔に佗を輕蔑し薄命を憐むの情なく孤独を恵むの心なく桃李一朝の栄夕嵐の運命を悟らず一旦事蹉跌して逆境に陥る時は忽ちに落胆失神世を恨み佗を羨み只管悲觀冥没して生乍ら神は閻憺たる獄の鬼に化しぬ。彼ら自業自得独り魂を傷め心を悩ます、世に敢て代る者なく娑婆の掟は、毫も彼らに特典を与えぬ。年命の暫くも停留せぬ。紅顏

も忽たちまちに蒼白そうはくに萎しぼましめ、翠黛すいたいの何時いつか皓白こうはくとし人生顛倒じんせいてんどうして幸福こうふくを主義しゆぎとし世よを快かい楽らくの舞台ぶたいと誤解ごかいしたる人生じんせいの末路まつろ実に哀あわれむべし。

顛倒を醒て絶対の安住を求む

仏陀ぶつだの教おしえに随したががい人生じんせいは自みづからは快樂かいらくの器具きぐにあらず。世界せかいは幸福こうふくを享うくる舞台ぶたいにあらず。全く顛倒てんどうより覚醒かくせいして人生じんせいを真面目しんめんぼくに意義いぎあるものと観かんじて、吾人ごじんの身みは是これ高こう等とうに進すすむべき修行しゆぎやうの器具きぐにして世界せかいは絶対者ぜつたいしやの高等こうとうなる涅槃界ねはんがいに進すすむべき道場どうじやうなりと観かんずる時は人生じんせいの不滿ふまんを滅めつし意義いぎある人と感かんずるに至いたらん。

天台てんたいに依よれば凡夫ぼんぶの生死しやうじの苦くを離はなれて永遠えいえんの安立あんりゆうを求もとむるに、教きやうに階級かいききゆうあり。四教しきやうに略分りやくぶんして其大意そのたいいを示しめさば、凡夫生死ぼんぶしやうじの苦くを離はなれ涅槃ねはんの楽らくを求もとむるの四諦しだいの法ほうなり。四諦しだいとは、苦諦くたい、集諦じつたい、滅諦めつたい、道諦どうたい、是これなり。斯こうである、凡夫生死ぼんぶしやうじの苦くを實じつに苦くなりと

諦あきらかに認めこのく此苦もとの元じゅうは集いと云ぼんう煩惱のうである。実じつに煩惱ぼんは罪惡ざいあくの本もとにして之これを实じつに断だんぜねばならぬ。滅諦めつたいとは煩惱ぼんと生死しやうじの苦くが滅めつすれば真空真如しんくうしんによの涅槃ねはんが顯あらわれる。道諦どうたい、其涅槃常樂そのねはんじょうらくに到いたるには三十七道品さんじちどうひんの道みちを修しゆすべきである。此小乘このしょうじようの四諦しだいは实じつに衆生しゆじようの生死しやうじの苦くは恐おそるべき実じつに道どうを修しゆうして真実しんじつの涅槃ねはんを求もとめて真実しんじつの安穩あんのんが得えらる。

二、無生むじようの四諦しだい。是これは前まえの小乘しょうじようの苦樂觀くらくかんと趣おもむきを異ことにしておる。苦諦くたい、衆生生死しゆじしようしやうじの苦くと云いうも実じつは凡夫ぼんぶが迷まよつて苦くと感かんずるものの苦くの本体ほんたいを諦あきらかに達觀たつかんすれば夢幻むげんの如ごとくにて夢ゆめの中なかに於おいてこそ、苦くと感かんずるものの醒さめて見みれば実じつの苦くでない。また涅槃ねはんの樂らくと云いい、生死しやうじも涅槃ねはんも昨夢さくむの如ごとく實際じつさい覺さめきたれば苦くも樂らくもないと、覺さとるのが無生むじようの四諦しだいと云いう。

三、無量むりようの四諦しだい。更さらに進すすんで別教大乘べつきようだいじようの菩薩ぼさつが苦集滅道くじゆうめつどうに對たいする觀想かんそうは苦くに無量むりようあり。菩薩ぼさつは一切衆生いっさいしゆじようの苦くを我苦わがくとす、故ゆゑに衆生しゆじように苦くある限かぎりは、我苦わがくなり。衆生無量しゆじようむりようなるが故ゆゑに苦くもまた無量むりようである。二、集諦じつたい一切衆生いっさいしゆじようの煩惱ぼん無量のむりようである。衆生しゆじようの煩惱ぼん無

量の故に我煩惱もまた無量なり。三、滅諦、一切衆生と俱に無上の仏果を期す。衆生無量の故に我成仏涅槃もまた無量である。四、道諦、仏道実は無量恒沙の仏法悉く学び法門無尽誓て学知せんと。是を菩薩無量の四諦と名づく。

四、無作の四諦（円教大乘）苦諦、仏が真実に覺て見れば此五陰の身も心も眼の視耳の聴く、有ゆる物は実は悉く真如の現にてある。然らば生死の苦はない。真如随縁の現われ、因縁に依て変化する迄のこと。故に生死とて本は真如なれば実に捨べきものでない。集諦、無明も煩惱も実は本覺の体にて自覺せねばこそ煩惱と妄用しておる。此煩惱が自覺すれば即ち菩提の覺である。

道諦。断常の二見も邪見も実は其本心に立還て見れば中正の知見なれば、之を除きて更に道の修すべきなし。真実の仏は本有無作の三身なれば道を修して初めて其本体が出来るべきものでない。滅諦、生死の本体が顯わるれば即ち涅槃なので生も実の生なく死も実の死なく、涅槃も眞の涅槃でなく生死の本源を覺る時は即絶対平等法身

が顕あらわれ来りて涅槃ねはんである。斯かく覺さとる時は生死しやうじの苦くも真如しんによの現あらわれ涅槃ねはんも自性じしやうの現あらわれであるとは、仏ほとけ及び円教えんきやう聖者せいじゃの達觀たつかんである。

光明主義の四諦

通つう仏教ぶつきやう中最ちゆうもつとも進すすみたる円教えんきやうの無作むさの四諦しだいの觀かんと云いうは先まづ智慧ちえを以もつて衆生しゆじやう本有ほんぬむ無作むさの真理しんりを達觀たつかんするにあり。即すなわち凡夫ぼんぶが仏ほとけに成なると云いうも、其その實じつは本々もともと各自かくじ無作むさの三身さんじんが具有そなわておる。仏法ぶつぽうの修行しゆぎやうに依よつて夫それを開顯かいけんするまでのこと。例たとえば宝石ほうせき自己じこに具有そなわせる光ひかりを琢磨たくまして光ひかりを放はなつ如ごとく、本自己もとじこに具有そなわせる性質せいしつを更さらに造作ぞうさするにあらず、永恒えいどう涅槃ねはんの性しやうも本自己もとじこに具有そなわておる。夫それを覺さとらずして凡夫ぼんぶは、自みづかく苦くを感じかんじておる。若もし自己じこの奥底おうていの自性清淨じしやうじやうじやうが顯あらわる時は、生死しやうじの体たいが即すなわち涅槃ねはんにて煩惱ぼんのうが即すなわち菩提ぼだいにて是これ天台ていだいの四諦しだいである。今いま光明くわうみやう主義しゆぎの四諦しだいは説せつの如ごとくこの我われら生死しやうじの凡夫ぼんぶが煩惱ぼんのうのま

ま如來光明の中に仏と共に有がたき樂しき生活が得らるるのは光明主義の四諦である。苦諦、實に人生に生死の苦を感じるは實に如來の恩寵なり。人生の煩悶は我ら愚昧の凡夫に永恒の安穩の要求を催す警告なり。例えば、身体の局部に創傷せし時、出血は忽ちに痛苦を感じず。若し痛苦の警告なかりせば、多量に出血し甚しきは生命を危害に及ぼすも敢て治療を施すこと怠るならん。痛甚劇き時は創傷の治療を敢行するが故に、辛痛は自然が生物の生命保護の警告なる如く、吾人の宗教心に於ても亦然り、若し人生の苦を感じるの警告なかりせば吾人の愚昧なる子は眞実に親を願ひ道を求めて永恒常樂を要求するの機会を得られぬ。我等は頑是なき小兒なり。如來大慈父が子らに対して汝ら生れしままの心情肉の我には苦憂を感じずべき性情を以ておる。故にまた共に如來の恩寵を被むりて靈の生命に復活する時は平安なる精神になり得らるる。例えば寶石も琢磨に依りて本性が発揮する如くに衆生に靈的に我等に人生苦悶と云う警告を与え給う慈父の恩寵である。吾人が天性素朴の愚昧なる肉の快樂を

貪り世界を幸福の処と想ひ、連も自ら生死を超て涅槃の父の懷に証入せんと云う志は起らぬ。依て人生々活の難、死の怖、種々の生理的の恐怖憂悲を感じしめて、初めて此苦を抜けて精神に安き道を求むる動機とはなるのである。されば此意味に於て人生の苦悶も是如来の恩寵である。

人生は向上の一路

人生、否、生死の問題に就て、若し煩惱が発るあらば、是れ必ずしも不幸でない。寧ろ如来より子に對する恩寵である。実は人生の苦悶も宗教要求の予備として人々に賦与せられたる親の賜物である。人間以下の動物には斯ような靈的平和を予備せる苦悶、光明を秘め置く闇黒の情はない。人間は特寵を被むりたる生物頭腦に靈物を秘め置く衆生である。動物の台に高等なる靈的生活の靈樹を接ぎたる人生には心機一転

すべき準備を有せり。

天より人生に対する謎は一切の青年に問われたり。人生何の目的なる哉。此謎の解決はヘツケルの如くに簡単に解決せらるるものでない。人生は一個の飯袋子を保存する番人であるか。全体人はあくせくして何れに向つて進むものならん。

実に此謎に対しては教祖仏陀さえも凡位太子たりし時に痛く御頭を悩ませ給いき。人生の謎は慈父より我等に対する試である。抑此人々の銘々此謎の解決が人生の価値を判むる定規である。可惜青年時代に唯肉の快楽を以て目的とし食色の欲を恣にして青春の血氣を動物欲に漲らし肉欲の満足を以て自ら任ずる如き人生行路の発足点が闇黒に向つて動物の行路に墮落する如きは実に愚の極みである。焉に於てか百尺竿頭に一步を進めて教祖の太子たりし時の如く物質の幸福を顧みるの暇なく九蒼無窮の中に甚深なる光明を発見せんと欲し金剛の意志を磨きて突進したる大人士幹の志こそ尊けれ。実に斯の如き意志こそ実に貴重なる人生の勝利者として月桂冠を戴く勇

將しようと成なり得えらる。人々ひとびと天てんより各々おのおのの頭腦ずのうの奥底おうていに深ふかく最もも堅かたく密封みつふうせる一いっの宝篋ほうきやうを秘ひめて授さづけられたり。此宝篋このほうきやうを開ひらくものは三千世界さんぜんせの有ある宝たからよりもっともっと尊とうとき宝たからを我有わがものとすることを得えらる、然しかれども此宝篋このほうきやうを開封かいふうするは至難しなんの事ことである。而しかして自みづか之これを開ひらくは困難こんなんなれども、授与じゅよし給たまいたる、ミオヤの恩寵おんちやうを仰あおぐ時ときは、何時いつか天てんの一方いっぽうより群雲ぐんうんの隙間すきまを洩もれる星ほしの光ひかりは輝かがきて我われらが頭上づじやうに來きたる時ときあり。其時そのときに及および忽たちまち開ひらけん。

苦惱と罪惡の苦悶

我等われらが感情かんじやうなるものは、仏陀ぶつだの安住あんじゆうし給たまう處ところに精神せいしん的に住じゆうするにあらざれば、眞實しんじつに安穩あんゑんは得えられぬ。仏陀ぶつだの安住あんじゆうし給たまう處ところに到いたらんには二つの関門かんもんを通とおらねばならぬ。一いっに人生じんせいの苦悶くもんと、二にに罪惡ざいあくの煩悶はんもんなり。人生苦悶じんせいくもんにつきて既に明すしぬ。是天然これてんねんの人ひと

には脱却せねばならぬ性を有ておる。即ち生の怖れ死の恐れ等何となく種々の煩悶は人間の胸中に交起る。また人生幸福の追求欲望に対して世は之に満足を与えぬ。即ち之れ求不得苦なり。然れども是の如きの苦は実は自己顛倒の結果なるを悟る時は心機一転する。而して其問題の来るに斯である。全体苦の源因は即ち罪惡である。罪惡の源は、自己胸中に伏在せる煩悩である。例えば身体に発熱するは、病根あるからである。人の煩悶の熱が時々に発するは即煩悩の病がある故である。人々自己の胸奥に恐るべき爆弾を懐きおる間は実に安心は得難い。胸中に伏在する煩悩、謂ゆる貪瞋痴の種々の弱点が悉く聚合して胸中に堅め込でおる。機会に應じて競い起る。然るに外には煩悩を誘惑する倡房酒肆等が世に充滿す。また憤怒恨怨を惹起すべき機會は何の処にも在る。自己の胸中の煩悩魔と外界の誘惑魔とは之を脱却せんと欲するも自己の力の及ばざる処、止めやめんとすれば益々起り犯すまじまじとすれば弥熾なるは即ち内に伏在する煩惱魔である。之を脱却せんには力の及ばざる処とて終身之が

奴隸と成り永遠の闇黒に墮落することは、奥底に伏在する靈我としては忍ぶこと能わざる処、自己の力の弱きこと世界は頼りにならぬ事を自覚し之が為に大なる苦悶となりて初めて真実に大なる物に對する信頼心が起る。実は此煩悶もまた如來の恩寵である。此苦悶が実に自己の無力を認め絶対の如來に歸命信頼するの動機である。自己罪惡の苦悶甚深なる懊惱より血と涙とを以て仏前に罪障懺悔の因となり、甚深悲痛なる懺悔の筈には自己の生命を犠牲けても如來の光明獲得を仰ぐに至らん。全く自己を犠牲けて罪惡の我より脱して如來の慈悲に懷かる時、無始以來の凝結せる頑固の我も大慈に融解して靈の我に復活す。然る時は忽ち大なる恩寵の懷に育られ畢竟常樂の狀態と為る。罪惡自覺の暁より大悲の懷に抱かれ常住安穩の所に至るの信仰に三階あり。一に歸命、二に融合、三に安住。

帰

命

(感情の信仰)

自己の罪惡を恐れ自己の無力を認め、絶対の實在者を信じて己を獻げて、信賴する心を帰命とす。帰命とは自己の生命を獻げて救を求むる義なり。

我苦惱の本は全く自己の罪惡である。此罪惡は自己胸中の生得我に附纏ておる。速も我力にては除くことはできぬ。此を解脱するは容易でない。実に古人が煩惱深して底なく生死の海辺なしと。我らが業障の根は無始の本源に根ざし業障甚深なるを反省する時は懺悔の念弥々激昂し来る。

仏陀の親化に預りて自己罪障甚深を自覺し至心懺悔の実を以て現に弥陀の光明に照され忽ち無生法忍を悟りて靈に復活したる韋提希夫人は仏陀に哀を求めて帰命信順したる状を經の緣起分に明せり。夫人は曾ては摩伽陀国の国母、娑羅大王の正夫人と

して身を珠簾奥深き宮中に在て榮華の春閑かに、榮曜の香薰しき九重の庭に憂世の辛
 き風は未だ曾て肌に触れし経験はなかりし。八苦の娑婆とは余所に聞給いしならん。
 そのゆゑ夫人の大王は徳厚く国家平穩よく治まり四海は静かにして民大平樂を歌う。加
 之仏法を以て民心を修め錦上に花を添え太平の海静かに正法の風徐ろに吹き上下共に
 和睦の香を四方に流ししかば、国王の夫人なれば謂えらく、人界ほど幸福なるはあら
 じ、願くは生々に人身を受け世々三宝に値わんと、常に仏陀に随て五戒を受け八齋
 戒を奉持せしも、併ながら人生は全く常住の平和を許すべき処と。必しも人生逆境
 な無きを得んや。昨日の美わしき天氣に反して今日の大暴風雨となる人界を襲う氣圧は
 九重の奥深き夫人の身辺に圧し来れり。其は他ならず、曾ては賢明の太子孝順なる嗣
 子と称えられたる太子阿闍世も彼の邪見にして大野心家なる豪欲の提婆の奸智と執拗
 なる誘惑には質朴なる太子端なくも心を動され世にも有るまじき逆意をこそ発しけ
 る。即ち父王を執えて七重の室内に幽閉し堅く門戸を閉し守門を以て警守せしめ、御

膳を絶て父王を殺害せんとの方便である。夫人の驚愕惜く処なく何かにして助け参らせんと密に衣の裡に麝蜜を塗り瓔珞の中に蒲桃漿を盛りて大王に供し奉りき。然るに夫人の密贈は何時しか太子の聞く所となり、太子は大に激怒して既に利剣を執て一刀の下に母の夫人を害せんと為したりしが、幸にも二の侍臣耆婆と月光の忠実なる諫言によりて辛くも白刃の下は遁れたり。然れども憂愁に堪ざるは更に大王に食物を贈ること遏絶せられぬのみか、内官に命ぜられて夫人をば深宮に幽閉せられて、再び大王の安否を親しく訪ぬることができぬ。既に幽閉せられたる夫人の心情はいかに愁憂憔悴して自ら安ずること能わず、仰で天に訴るも伏して地に訟るも由べなく天聞く地黒く何れに向つてか此慘過を訴えん、誰か此悲歎を容れ給うものぞ。唯靈山に在す恩師釈迦如来に依て慰安を求むる外に道なきを識り、遙に靈山の方に向て悲泣雨涙して願くは我為に阿難目連尊者を使わして我を慰藉し給えと念じ上れば、靈山に在す世尊は韋提希の心の所念を知ろしめして、忽ちに阿難と目連との両弟子に勅し

て二人を侍して靈山に没し給えば忽ちに形を王宮の空中に現じ給いぬ。時に韋提希は礼し畢て世尊釈迦如來の身は紫金色にして百寶蓮華に座し給い兩弟子の左右に侍し釈梵等の諸天が空中に在て普く天華を雨して用て供養し上る靈相を瞻觀し上り、云何とも恐懼惜ことなく自ら瓔珞を断て挙身を地に没じて号泣して仏に向つて白して言さく、世尊我昔何の罪ありてか、我が悪き子を産める、世尊は亦何の因縁ありてか提婆達多を眷屬とは為し給いしぞ。只願くば世尊よ、我為に畢竟じて安心を得らるる処を教え給えと。

此一節は即ち今日まで從來たのみ來りたる此世界も、また我現の此身は実に頼みにならぬ事を感じ自己の非惡を自覺し絶對的に依頼して永遠の安心を得べき道を世尊に請願したり。もはや此時に夫人は自己には毫も力なく、すべてを獻げて世尊に信頼し上れり。夫人が曾ては人界程目出度はなく人身ほど幸福はなしと思ひ込たる感情は此大逆風の為に俄然と崩壊せられ現在の身は罪障深重にして現實の世は絶對的に依怙

すべき処に非ずと自覺せられた。恐るべきは己が罪障厭うべきは娑婆の憂世と、ほとほと厭忌の情が禁じ難かった。夫人は自己は苦悩と罪惡の甚深を認めて厭忌して救を仰げども、未だいかなる偉大なる靈格に信賴せば、此苦悶の裡より救済せられ永遠に安穩を得らるべき、我は自から知ること能わず、故に至誠に釈尊の教を仰がれた。此心理状態を感情が深甚の悲痛の懺悔を以て絶對者に歸命するの感情と為す。

歸 命

歸命とは自己の無知無力を自認し絶對的に信賴すべき對象に對して全身全力を悉く投歸没入するの謂なり。韋提希夫人は此濁惡の娑婆は憂悲と恐怖との充滿する処、我身は罪惡深重のもの、願くば我に絶對的に信賴し永遠の安穩所を教え給えとの自己の總てを獻げて全心全幅を投じて歸命したる夫人の心情を聖善導が述べ給うた。夫人

真心しんじん徹てつ到たうして苦くの娑婆しやばを厭いとい樂らくの無為むゐを欣ねどうて永ながく常樂じやうらくに歸きす。但ただし無為むゐの境きやうには輕きやう爾にとして階のぼるべからず。苦惱くのおうの娑婆しやばは軌然きぜんとして離はなるるに由よしなし。金剛こんごうの志こころざしを發おこすに非あらざるよりは、永ながく生死しやうじの元もとを断たたんや。若もし親したしく慈尊じそんに従したがはずんば、何なんぞ能よく此この長歎ちやうたんを免まぬれんと。斯文このぶんに能よく歸命きみやうの感情かんじ状態じやうたいを写うつせり。若もし情じやうの信仰しんごうを三位さんゐに立たつ時ときは初歸命はじめてきみやうは感情かんじにして、融合ゆうごうは心情しんじやう、安立あんりゆうは情操じやうそうに配はいす。歸命きみやうとは未いまだ正まさしく客体かくたいなる、如來にょらいと自己じことの親密しんみつなる情じやうの融とけ合あうまでに至いたらず。如來にょらいは在ましますと云いうものの未いまだ確たしかならず。また自己じこが全まったく親したしく精神せいしん的に交涉かうしやう出來きるか未いまだ確たしかならず。自分じぶんを顧かえりれど罪惡ざいあくの凡夫ぼんぶ闇黒あんこくに趣おもむく外ほかに道みちなく、また歸命きみやうすべき如來にょらいは遠とおく広大かうだいにして甚深じんじん、我われと如來にょらいとの懸隔けんかく甚はなしければ我わが信仰しんごうを如來にょらいは容いれ給たまうや。我われいかにして如來にょらいに契かなうべき、弥陀みだは一切諸仏いっさいしよぶつも悉ことごとく称揚讚嘆しやうやうさんたんせざるはなき尊大そんだいなる如來にょらいにして遠とおく只尊ただとうき名なのみ聞き上きりて高たかきのみ。天てんに遙はるかに憬あこがるも我われらは業障ごつしやうの雲深くもふかくして神聖しんせい無上むじやうの尊そんには近ちかづ難がたし。されど釈尊しやくそんの勸すすめすに依よれば弥陀みだは久遠劫來くおんごうらいの大おほミオヤと聞きさるれば

内心ないしん自おのづと親おやに對たいする親密しんみつなる感情かんじょうはあるもの、大悲だいひの御手みてに摂おさめらるる若もしも御手みてに接せつせざれば永劫えいごう沈淪ちんりんの免まぬざるを思おもう時ときは縱令たとひ身命しんめいを捨すつとも如来にょらいの御手みてにすからざるを得えぬ。我等われら無始むし以來いらい慈悲じひのミオヤを離はなれ孤兒こじと為なりて三界さんがいを流浪るろうし未來みらい遠々えんえんと、いつを限かぎりとしらぬ身みの、若もしも大悲だいひの懷ふところに摂おさめられ、暖かなる慈愛じあいにあたためられ、靈れいの生命せいめいに活いかされずば浮うかむ瀬せなきを思おもう時ときは父子ふし永劫えいごうに遇あひ難がたく、弥陀みだ弥々いよいよ慕たのわし。されど業障ごつしょうの闇やみは除のぞき難がたく煩惱ぼんのうの火ひは常つねに胸中きょうちゅうに横よこり未いまだ如来にょらいに慈光じこうを蒙こうむらざれば、安心あんじん得え難がたし。

經驗けいけんせざるが故ゆえに只ただひ非常ひじょうに焦こがれ接せつ近きんを求もとむ。其その心こころ状じょうを卑ひ近きんなる例れいを以もつて、若もし男だん女じよの間に於おいて愛者あいしやに對たいして未いまだ逢坂おおさかの関せきを許ゆるされぬ程ほどは感情かんじょう的に熱烈ねつれつである。詩しに窈よう窕たうたる淑女しゆくじよは寤寐ごしんに之これを思おもう。之これを思おもうて得えざれば展轉てんてん反覆はんぷくすと、云いう如ごとくに、逢坂おおさかの未いまだ成立せいりつせざる間あいだは甚はなはだししょうらい將來しやうらいのいかがを疑うたがうて、煩悶はんもんに耐たえぬ。今いま歸命きみきやうの感情かんじょうは如来にょらいを我有わがものといたしたく我如来われにょらいのものとなりたく、遙はるかに雲上うんじやうのあなたに恋念れんねんして未いまだ得え

ざるから得^えまほしき心^{しん}状^{じよう}である。真^{しん}面^{めん}目^{もく}に信^{しん}仰^{ごう}此^こに至^{いた}る時^{とき}は肉^{にく}の身^{しん}命^{めい}は物^{もの}の数^{かず}と思^{おも}わ
で只^{ただ}如^に来^{よら}に己^{おのれ}を献^{ささ}げて全^{ぜん}身^{しん}全^{ぜん}幅^{ふく}を投^{とう}じ我^{われ}は如^に来^{よら}の有^もなりとの靈^{れい}的^{てき}結^{けつ}婚^{こん}の目^{もく}的^{てき}を遂^{すい}行^{ごう}せ
んが為^{ため}に焦^{こが}れざるを得^えぬ。之^{これ}が人^{じん}生^{せい}の一大^{いちだい}事^じ、之^{これ}を遂^{すい}行^{ごう}せずば、生^{せい}命^{めい}何^{なん}の為^{ため}かとの金^{こん}
剛^{ごう}に結^{けつ}晶^{しやう}したる感^{かん}情^{じよう}を帰^き命^{めい}と云^いう。此^{この}感^{かん}情^{じよう}的^{てき}に己^{おのれ}を帰^き命^{めい}したる信^{しん}仰^{ごう}が益^{ます}進^{すす}歩^{しん}するに
随^{したが}つ弥^い々^い因^{いん}縁^{えん}相^あ熟^{じよく}して陽^{やう}春^{しゆん}の和^わ氣^きに催^{もよお}されて爛^{らん}漫^{まん}と美^{うる}わしき色^{いろ}と馥^{ふく}郁^{いく}と香^かを流^{なが}した
る時^{とき}に華^{かし}燭^{しよく}の礼^{れい}を挙^{あげ}る如^{ごと}きの信^{しん}仰^{ごう}状^{じよう}態^{たい}を人^{ひと}の信^{しん}仰^{ごう}中^{ちゆう}心^{しん}なる情^{じよう}と如^に来^{よら}の恩^{おん}寵^{ちゆう}との親^{しん}密^{みつ}な
る交^{かう}感^{かん}より融^{ゆう}合^{ごう}とす。是^{これ}よりの心^{こころ}を心^{しん}情^{じよう}とす。

融合と心情の信仰

宗^{しゆう}教^{きやう}の中心^{ちゆうしん}真^{しん}髓^{ずい}は情^{じよう}の信^{しん}仰^{ごう}即^{すなわ}ち自^じ我^がにあり。自^じ己^この中^{ちゆう}心^{しん}に如^に来^{よら}の大^{たい}我^がとの融^{ゆう}合^{ごう}する
処^{ところ}にあり。真^{しん}実^{じつ}に此^こに安^{あん}住^{じゆう}するを得^えて初^{はじ}めて真^{しん}の安^{あん}寧^{ねい}を得^えらる。若^もし大^{たい}我^がの中^{ちゆう}心^{しん}と小^{しょう}

我が中心なる心情と融合して親密の極、入我々人の状態に到るの順序として初め感情の門を通すべきである。初めに如來を遠きみ空に懷れ一心に念仏して恋念して止まぬ。聖法然が我は只仏にいつかあおい草、心の妻にかけぬ日ぞなき。と、詠じ玉いし大宗教家の内容豊富に対象物に対する恋愛の情の深きを知るべし。釈尊が大に形に愛するやすだらちを顧みず、只靈界の美人舍耶円満の靈しき聖容の見欲さに懷がれしことよ。されば釈迦自から然るが故に若我滅后に於ても我を恋慕して一心に仏を見ま欲しく自ら身命を惜まざれば其の心の恋慕によりて我も出て為に説法すと。是仏陀が曾て自己が靈界の舍那円満の如來を見ま欲き情を以て未來の衆が我に對する情を然あらんと汲玉いて日いいしならずや。一心に念仏して弥機が熟して融合に入るの心状は、譬えば春日和氣桜花爛漫と咲匂う時彼らは、無情乍らに雌雄の交感を為す造化の妙用を為す如く、先に雲上遙かに懷れし如來は今念仏三昧の床の前に現來り如來真金色円光徹照端正無比の聖容是れ我らを愛念し給し慈悲の表われ、念々不捨の称名に如來の

慈悲の暖氣は我らが情を融解し我らが愛念の情は大なる如來の慈悲の懷に抱擁せられ、何時かは隔てし雲を排きて慈悲の融容に接し小さき我は融てアナタの大我に合う。焉ぞ悉陀太子が最愛の妻をも顧みず、只一心に慕念して、三昧の床に入て舍那円満の月の聖顔に接し彼の大我と三密融合し我は汝の有、汝は我有と、宇宙最奥の大我と入我々入の妙境に入て自受法樂を受たる心情を融合とは云わめ。小乗仏教の釈尊には如上の宗教的理想の最妙最靈なる内容の妙境を漏しておらぬ。大乘円満なる華嚴の三昧に入て、蓮花藏界のいと美わしき床の上に於て、大我の舍那と釈迦との融合の時に、尽十方の無尽の法界中の有ゆる莊嚴と及び微妙的内容の法樂を以て充されしことは、実に如來自知の境にて之を十仏の自境界また自受用法樂にして十地の菩薩等も測知することはできぬと、示されてある。先の韋提希夫人が感情の帰命の状態をのべたりき。また進て夫人が釈尊の教に随て弥陀の心情と融合の靈境に入ることを陳ん。夫人が已に金剛の志を發して釈尊に向い何にせば弥陀に接して大悲の懷に抱

擁せらるべき我に思惟を教え給え我に正受を教え給えと請ければ、釈尊は韋提希の心を知して、初めに日想観より次第して順序を経て弥陀に接し上ることを得せしめた。釈尊が韋提希に諦に聴け能く思念せよ。汝が為に苦悩を除き永遠の大安穩を得ることを示さんと説き給う時に、無量寿仏空中に住立し給う、観音勢至の二大士は左右に侍立し、光明熾盛にして具さに見るべからず、百千の金色も比と爲るに足らず。此に於て弥陀の大慈悲心は韋提の心を融し韋提希の心は弥陀の中に融込で心に大歡喜を生じて未曾有と歎じ廓然大悟して無生忍を得たりと。

夫人の身は深宮に幽閉せられて茲に災禍の中に在り乍ら神は歡喜無生の悟を得なされし。既に無生忍を得れば身は娑婆に在り乍ら心は弥陀の淨土にあり。然る時は現在幽閉の憂惱はなくて、靈妙の歡喜に満さるる。既に心情が生れ更て見れば何の処か極楽涅槃の境ならざらむ。

喩ば植物の色麗わしく、香芳しく匂う時に造化の妙用により新らしき子の生命が

生うまる本もとが出来るでき。神人しんじん交感こうかん神秘しんぴの妙用みょうゆうに依よつて靈きよき信仰しんこうの心こころは生うまれて真しんの仏子ぶつしと成なるこ
とが融合ゆうごうの中心ちゅうしんにして、爾後じこは常つねに如來にょらいと共ともに在あることを得う、之これを心しん情じやうの信仰しんこう融合ゆうごうと
す。

安 住

情じやうの信仰しんこうに於おいて融合ゆうごうが心こころの花はなとすれば安住あんじゆうは結果けつかなり。融合ゆうごうの靈感れいかん微妙びみょうの熈怡きい快樂かいろく
の美びにして且かつ馥郁ふくいくとして芳かんばしき香かおりを放はなつて我われは如來にょらいの有ものなりとの自信じしんは建たつた。我われ
は如來にょらいと離はなるるなき靈れいにて靈れいの我われが如來にょらい大我うちの中に安立あんりゆうしての生命せいめいである。已すでに爰ここに
到いたれば身みは人界にんがいに在あれども神こころは如來にょらい光明こうみょう中に住じゆうす。如來にょらいの在ましま極樂とくらく涅槃ねはん界かいなれ
ば、此處ここまた淨土じやうどなり。真善微妙しんぜんみみょうの花はな匂におい光榮こうえいと靈福れいふくとの光輝ひかりかがやく心しん靈れいの都みやこなり。爰ここ
に安住あんじゆうする時ときは世よの八風はつふうの為ために動搖どうようせられず。永とこえに安穩あんのんなり、此これを諸仏しよぶつの住處じゆうしよと

す。縦令諸仏の如くに四徳の莊嚴顯現せざるも理想は如来光明界に安住す。如来無量功德の莊嚴する処、仏智不思議の境界は、必しも十萬億土に限りておらぬ。阿彌陀仏こそをさることおからず去れ此不遠である。人間の心を捨て如来大慈悲の懷に抱擁される。此処即ち淨土である。人間の業識を以て娑婆と許り認ておる。若し肉眼を用いず、心眼にて見れば阿彌陀仏現に此に在ます。經の下に釈尊が阿難等に汝阿彌陀如来を觀たぐば恭敬して無量壽仏を礼し奉れよと。忽ちに阿彌陀如来大身虚空を満し、光明普く十方を照し給ひ、また無比莊嚴の輝く淨土も眼前に顯現すと説給てある。實に仏眼にて見れば十方界悉く清淨仏土ならざるはない。故に我等仏眼未だ開けざる故に、淨土現前せざるも、然ども常に尽十方無碍光明中に大悲の懷に抱擁せらるることを信ずべし。仏陀は常に彌陀の大我の慈悲中に安住し給うが故に情に於て不動なり。故に大雄者たり。世雄仏陀はすべての衆生を自己と同じく彌陀の中に安住せしめんと欲し一に衆生に教ゆるに彌陀に信賴すべきことを以てし給えり。眞実の畢竟安穩所は唯一なり。そ

は他ならず、自己の有限なる我を頼みとする人間の子たる我を転じて如来の子たる我に從來の世界依属の心を変じて絶対なる弥陀の大悲の懷に安住するにあり。三世十方の諸仏の心の安住し給う処即ち絶対弥陀の大我なり。即ち極楽無為泥洹なり。弥陀在ます処是極楽涅槃界、然れば我等自己の狭少なる心情を絶対弥陀の大我に轉じたる処即ち我等が安住処なり。

仏陀は自ら此大安穩処に安住し給うが故に一切衆生を誘て弥陀の中に安住せよと教え給えり。

情 操

既に仏陀の教に依りて弥陀の大悲光明中に安住することを得たり。然る上は我は弥陀の有なり。また弥陀は我有なり。尽未来際に離別なき結婚なり。我らは縦令無上

覺を得ずも無量光にて無量寿に合したので一切諸仏を統一し給うは弥陀なり。諸仏は続られたる覺者なり。故に諸仏は弥陀の中に立て常に十方に示現して衆生を誘導するに弥陀に帰せよと教え給う。諸仏が衆生に弥陀に帰命せよと教ゆるは即ち自己の本体に信頼せよと教ゆることなり。

弥陀に依て靈に生れたり、我靈の生命は弥陀と離ること割ることのできぬ關係を以ておる。我は全く弥陀の所有である故に弥陀に永えに無上の恩寵に愛せられ無比の慰安を与えられつつある。焉に於て我らは自心を建立する者は即ち弥陀に對する貞操なり。例えば貞婦の夫に對する如きの情操である。

此靈の貞操こそは眞の生命である。いかなる事情の下にも弥陀に對する歸命信順の貞操は動かぬ処に偉大なる力がある。

弥陀との結びたる靈は皓々として潔よい。然れども肉の煩惱のある限りは胸中の悪魔動すれば本の我に逆睹せんと謀る。縦令全く本の主義に戻らざるも聖意に背きて敢

慚恥せぬ。弥陀に對する情操を破壊せんと爲る機會數多あり。其は佗にあらず種々
 の異教異學異行別行の輩である。弥陀と結婚し常に弥陀に融合し既に安立したる弥陀
 に建たる情操を完全にしてこそ実にミサオと云う。ミサオの立たる即ち核の結たる信
 念である。いかに一時の熱烈なる感情の信は起したる共情操にして不動に安立するに
 非ざれば核の未だ結ばざるものである。弥陀に結んだる情操の信仰こそは、自己が弥
 陀の種に結びたる核である。聖善導は人の信仰の情操を建ていかなる事情の下にも動
 ぜざる様にせよとて、若人ありて經論を引証して念仏淨土に生ぜずと誘うとも決定し
 て破せられざれ、縱令化仏報仏若は一若は多乃至十方に徧滿して各々光を放ちて舌を
 吐て徧ねく十方に覆て曰く釈迦の教に隨て一切の凡夫が専心念仏して往生を得と云
 は此は虚妄なりと定めて此事なしと曰うとも、此等の諸仏の説を聞と雖ども畢竟じて
 一念疑退の心を生ぜざれ、唯益々上々の信金剛の情操を建て爲に動乱せられざれと。
 眞実に能く釈迦の教弥陀の本願を信解する時は決定の信不動の情操は建立するに至

らん。何となれば弥陀は唯一の大慈父久遠劫の昔より子らが慈父の許を離れて六道流
転の迷を憐れみ、慈父の恩の遺る瀬なく、種々に名を易え年紀を殊にして、或は燃燈
仏等乃至無量仏と為りて此五濁の世に出で親の聖意を伝え給う。殊に法蔵菩薩と為て
出給いし時の如き、子を哀む親の慈悲、子等をして永遠快樂安穩ならしめん為には縦
令身を子らに代る為ならば、無間八熱の苦毒の中に止むとも益々精進して安忍忍びて
悔ざらんと慈悲の程こそ知らるべし。実を越して論ずれば本覺の眞の慈父は只独り
弥陀のみなり。十方三世一切の諸仏と曰は唯一の慈父より分身して世に出で一たび慈
父に背き六道に流転する衆生を憐みて十方の有ゆる世界に身を分て出給い衆生の為に
子等を思ふ慈父の聖意を伝えんが為めなり。法蔵菩薩となりて出給いし時は我等が親
の聖意を示されて、我汝を愛する故に汝もまた我を信じ我を愛せよ、また我に來れよ
我は慈愛の光を以て汝等を抱擁して放さぬとの聖寵の程こそ辱なし。されば十方の
諸仏も悉く全力を尽して弥陀を稱揚讚歎し給うことは我等を二心なく弥陀に仕え不

勤^どの貞操^{ていそう}を建立^{こんりゅう}し全く^{まった}弥陀^{みだ}との結合^{けつごう}せる信心^{しんじん}の核^{かく}を結び^{むす}靈^{れい}に活^いきて頓^{やが}て仏果^{ぶつか}の実^みを得^えせしめん^{ため}為^{ため}のみ。

弥陀^{みだ}と諸仏^{しよぶつ}とは本同一^{もとどういつ}の大慈父^{だいじふ}、されども弥陀^{みだ}としては我^{われ}を攝取^{せつしゆ}の主^{しゆ}となし諸仏^{しよぶつ}としては其媒介者^{そのばいかいしや}として示現^{じげん}し給^{たま}うた。また凡夫^{ぼんぶ}の常^{つね}として自己^{じこ}の配偶者^{はいぐうしや}を選択^{せんちやく}するの情^{じよう}を有^{もち}ておる我^{われ}らが心情^{しんじよう}に應^{おう}ぜんが為^{ため}に、弥陀^{みだ}は十方一切^{じつぱういっさい}の国土^{こくど}より有^{あら}ゆる善^{ぜん}を選^{えら}み美^びを択^{えら}み、真善微妙^{しんぜんびみよう}の淨界^{じようかい}を建て諸仏最尊^{しよぶつさいそん}の尊体^{そんたい}と現^{あら}われ、我^{われ}に無上^{むじよう}の愛^{あい}を以^{もち}て迎^{むか}せ給^{たま}う。我等至心^{われらししん}に信愛^{しんあい}して弥陀^{みだ}に結びたる情操^{じようそう}は頓^{やが}て諸仏^{しよぶつ}と同じく大雄者^{だいゆうしや}と為^なりて弥陀大我^{みだたいが}の中に安住^{あんじゆう}して諸仏^{しよぶつ}と同一^{どういつ}の安穩^{あんのん}を得^うべし。